

虐待の世代間連鎖 —性別による違いに着目して—

眞田 英毅*

teruki.sanada.s8@dc.tohoku.ac.jp

付記

本報告は 2018 年 7 月に行われました第 65 回東北社会学会大会における発表を修正したものです。発表の際には有意義なコメントやアドバイスをいただきました。記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

記述統計量

従属変数

本研究の従属変数は体罰容認意識である。これは、身体的虐待における暴力が体罰に近いことを踏まえ、この変数を用いた。JGSS-2008 では Q62 『親による体罰は、時により必要である』という意見に、あなたは賛成ですか、反対ですか。』という質問で体罰に関する意識を調査している。この質問への回答を反転し、体罰意識として「5. 賛成」～「1. 反対」の 5 段階尺度で用いた。表 1 は体罰意識の記述統計量である。

表 1 体罰意識の記述統計量（連続）

	最小値	最大値	平均	標準偏差
男性	1.00	5.00	3.98	1.04
女性	1.00	5.00	3.53	1.07

表 1 を見る限り、分布が右に偏っているのが見てとれる。このため本研究では、体罰に賛成しているかどうかのダミー変数として用いた。なお、「どちらともいえない」は反対の方に含まれている。この体罰容認意識の記述統計量は以下の表 2 の通りである。

表 2 体罰容認意識の記述統計量（ダミー変数）

	男性		女性	
	度数	%	度数	%
親の体罰に賛成	578	76.46	452	58.70
親の体罰に反対	178	23.54	318	41.30
合計	756	100.00	770	100.00

* 東北大学大学院文学研究科修士課程 2 年

独立変数（連続）

表 3 連続変数の記述統計量

		最小値	最大値	平均値	標準偏差
男性	教育年数	6	18	13.15	2.62
	世帯収入	1	5	2.66	0.88
	15歳時の世帯収入	1	5	3.25	0.93
	親の教育年数	6	16	10.49	3.38
	親のしつけの厳しさ	1	4	2.76	0.63
	子どもの教育責任に対する考え	1	5	3.20	1.30
	主観的幸福感	1	5	3.90	0.97
	政治的考え	1	5	3.00	0.98
女性	教育年数	6	18	12.57	2.19
	世帯収入	1	5	2.69	0.83
	15歳時の世帯収入	1	5	3.14	0.89
	親の教育年数	6	16	10.67	3.18
	親のしつけの厳しさ	1	4	2.82	0.58
	子どもの教育責任に対する考え	1	5	3.24	1.23
	主観的幸福感	1	5	4.00	0.90
	政治的考え	1	5	3.09	0.75

独立変数（カテゴリー）

表 4 カテゴリー変数の記述統計量

	男性		女性	
	度数	%	度数	%
1918-47年生まれ	158	20.90	197	25.58
1948-67年生まれ	205	27.12	233	30.26
1968-88年生まれ	267	35.32	207	26.88
大人からの暴力経験あり	197	26.06	111	14.42
大人からの暴力経験なし	559	73.94	663	86.10
子どもに男の子がいる	437	57.80	459	59.61
子どもに男の子がいない	319	42.20	311	40.39
結婚している（既婚・離死別）	599	79.23	537	69.74
結婚していない（未婚）	157	20.77	233	30.26
保守政党支持	207	27.38	199	25.84
保守政党不支持	551	72.88	575	74.68
農村部に居住している	268	35.45	278	36.10
農村部以外に居住している	488	64.55	492	63.90
合計	756	100.00	770	100.00

分析結果

男性

表 5 体罰容認意識に関する二項ロジスティック回帰分析 (男性)

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
切片	2.05 **	0.69	1.49	0.84	1.28	0.92
1948-67年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.32	0.22	-0.35	0.22	-0.27	0.22
1968-88年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.46	0.27	-0.38	0.28	-0.20	0.28
教育年数	-0.02	0.04	-0.03	0.04	-0.02	0.04
世帯収入	0.10	0.11	0.09	0.11	0.04	0.11
大人からの暴力経験	0.68 **	0.22	0.66 **	0.22	0.68 **	0.22
15歳時の世帯収入	-0.15	0.10	-0.16	0.10	-0.17	0.10
親の教育年数	0.00	0.03	0.00	0.03	0.00	0.03
男子ダミー	-0.41 *	0.19	-0.56 **	0.21	-0.56 **	0.22
親のしつけの厳しさ			0.20	0.14	0.21	0.14
子どもの教育責任に対する考え			0.06	0.07	0.06	0.07
主観的幸福感			-0.11	0.10	-0.11	0.10
結婚ダミー			0.56 *	0.26	0.58 *	0.26
保守政党支持ダミー					0.69 **	0.24
政治的考え					0.01	0.10
農村ダミー					-0.12	0.19
AIC	823.20		823.31		818.72	
BIC	864.85		883.47		892.77	

女性

表 6 体罰容認意識に関する二項ロジスティック回帰分析 (女性)

	モデル1		モデル2		モデル3	
	B	S.E.	B	S.E.	B	S.E.
切片	1.14	0.65	1.24	0.83	1.66	0.90
1948-67年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.39	0.20	-0.46 *	0.21	-0.43 *	0.21
1968-88年生まれ (ref 1918-47年生まれ)	-0.38	0.23	-0.41	0.23	-0.35	0.24
教育年数	-0.01	0.04	0.01	0.05	0.01	0.05
世帯収入	-0.06	0.09	-0.04	0.10	-0.05	0.10
大人からの暴力経験	0.22	0.23	0.18	0.23	0.18	0.23
15歳時の世帯収入	0.02	0.09	0.02	0.09	0.03	0.09
親の教育年数	-0.02	0.03	-0.02	0.03	-0.02	0.03
男子ダミー	-0.10	0.16	-0.04	0.17	-0.05	0.17
親のしつけの厳しさ			-0.12	0.13	-0.13	0.13
子どもの教育責任に対する考え			0.18 **	0.06	0.19 **	0.06
主観的幸福感			-0.17	0.09	-0.16	0.09
結婚ダミー			0.02	0.18	0.01	0.18
保守政党支持ダミー					0.20	0.18
政治的考え					-0.15	0.10
農村ダミー					-0.05	0.16
AIC	1051.75		1047.21		1049.97	
BIC	1093.57		1107.61		1124.32	

参考文献

- [1] Bandura, Albert, 1977, “Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change,” *Psychological Review*, 84(2): 191-215. (= 1979, 原野広太郎, 『社会学習理論—人間理解と教育の基礎—』金子書房.)
- [2] 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.
- [3] 細坂泰子・茅島江子, 2017, 「乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相」『日本看護科学会誌』37: 1-9.
- [4] 岩井八郎, 2003, 「経験の連鎖—JGSS-2000/2001 による『体罰』に対する意識の分析—」『日本版 General Social Surveys 研究論文集』2: 113-125.
- [5] 岩井八郎, 2010, 「容認される『親による体罰』—JGSS-2008 による『体罰』に対する意識の分析—」『日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集』10: 49-59.
- [6] Kaufman, Joan Zigler Edward, 1993, “Do abused children become abusive parents,” *American Journal of Orthopsychiatry*, 57(2): 186-192.
- [7] 金谷光子・杉浦恵子, 2006, 「しつけと虐待の狭間 子育て講座に参加した母親へのアンケート調査を通して」『母性衛生』47(1): 32-42.
- [8] Lee, Yanghee Kim Sangwon, 2011, “Childhood maltreatment in South Korea: Retrospective study”, *Child Abuse Neglect.*, 35(12): 1037 - 1044.
- [9] 李璟媛・津村美穂, 2014, 「未就学児の父親におけるしつけと虐待に関する認識と経験—2000 年と 2010 年の 2 つの調査に基づいて—」『比較家族史研究』28: 88-118.
- [10] 西澤啓, 1994, 『子どもへの心理的影響』誠信書房.
- [11] 新家一輝・篠原裕子・藤田三樹・津田朗子・西村真実子・関秀俊, 2004, 「児童虐待の認識に関連する要因—多重ロジスティック回帰分析による検討—」『小児保健研究』63(4): 436-441.
- [12] Stein Alan, Malmberg Lars Eric, Leach Prescott, Barnes Jennifer, Sylva Kathy the FCCC team, 2013, “The influence of different forms of early childcare on children’s emotional and behavioural development at school entry”, *Child: Care, Health and Development*, 39(5): 676 - 687.
- [13] 総務省統計局, 2017, 「平成 28 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果—」(2018 年 1 月 30 日取得 <http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf>).
- [14] Winton Mark A. Barbara A. Mara, 2001, *Child Abuse and Neglect: Multidisciplinary Approaches*, Pearson (= 2002, 岩崎浩三訳, 『児童虐待とネグレクト』筒井書房).